

日本保育学会第 73 回大会自主シンポジウム (J-A-11) 資料 1

シンポジウムタイトル:「あかし保育絵本土」養成の試み  
—その成果と課題—

2020 年 5 月 16 日 (土): 奈良教育大学: 14:40~16:40

企画・司会・話題提供者	佐々木宏子 (鳴門教育大学)
話題提供者	徳永満理 (おさなご保育園)
	村中李衣 (ノートルダム清心女子大学)
	山畑幸子 (明石市政策局政策室)

今回の大会は、新型コロナウイルス感染症の影響で「大会は成立したものとするが、開催期間に会場には参集しない」という形式になり、当日、配布を予定していた資料 1・2 が手渡せなくなった。ここでは、上記の話題提供者のうち、佐々木宏子の資料のみを公開する。

この資料のオリジナルは、「あかし保育絵本土」養成講座 (2019) 応用コース受講生のために作成したものである。養成講座で使用したときは、①~⑪までしか視野になかったが、受講生から応用コース修了にあたり、今後の研修はどのように継続すればいいのかという質問と要求が提起された。私は、明石市の制度としてはこれが最終コースなので、あとは受講生同士で自発的な研修の機会を持ってほしいと述べた。もし、自発的な研修会が開催されるならば、私は協力を惜しまないつもりである。

なお、本シンポジウムの話題内容は、日本保育学会第 73 回大会 (近畿ブロック)「保育の“とこしへ”と“うつろい”」論文集 CD-ROM (J-21~J-22) に掲載されているので参照されたい。

保育者にとって、大きな悩みは 3 歳未満児に多くみられるケースなのだが、集団での読みあいのとき興味・関心が続かず絵本から離れてしまう子どもたちの処遇であった。私は、0.1.2 歳児までは、原則は 1 対 1 が望ましいと思う。幼い子どもの場合、まだ一人一人の成長リズムが月齢によっても大きく異なり、集団で共通のものへの集中は難しい。もともと不可能なことを、「選書や読み聞かせの方法・技術」「保育者・子どもの能力」などの問題にすり替えてしまうことには、違和感をもつ。

## 資料 1

### 保育の場における絵本の「読みあい」を考えるためのポイント (俯瞰図)

保育の場で絵本を読みあう時、どれだけの“まなざしが”が必要か？

<p>留意点</p>	<p>「絵本の読みあい」を考えるためのポイントは、すべてが網羅されるべき項目ではなく、「読みあい」の背景にどれだけの世界が広がっているのかを考えるためのものである。</p> <p>それゆえ、保育者がオリジナルの項目を付け加える事も削除することも自由である。本参考資料は、保育の場における「読みあい」とはなにかについて、保育者同士が共通理解を深めるためのひとつの手段に過ぎない。</p>
<p>① 対象児と場所</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人もしくは複数人数（クラス単位など）の対象児とその絵本歴など</li> <li>・同一年齢もしくは異年齢（異月齢）</li> <li>・落ち着いた環境（閉じられた空間、屋外など）</li> <li>・精神的な雰囲気作り（遮光カーテン・照明・装飾などの使用）</li> </ul>
<p>② 読む人（責任者）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読み手と聞き手の関係（クラス担任・初めての人など）</li> <li>・読み手は一人、複数？</li> <li>・おとな、子ども？</li> </ul>
<p>③ ねらい</p> <p>ここは2段階に分かれる。</p> <p>【第1段階】 各施設の「要領」との整合性である。</p> <p>【第2段階】 具体的な「指導計画」（年・学期・月・週・日等）の詳細である。</p>	<p><b>【第1段階】</b></p> <p>『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型こども園教育・保育要領』の「ねらい」と「内容」を読んでいると、それらを具体的に意味する事例として生き生きと浮かび上がってくるものの中には、絵本の読みあいがもたらすと思われるエピソードが数多く存在する。もちろん一番大切なことは、豊かな環境の中で、保育者の支援を受けつつ乳幼児が遊び活動によって獲得して行くものが根源である。ここでは、これら「要領・指針」などの「ねらい・内容」と、絵本が深く関わる可能性がある条文を抜粋してみる。</p> <p><b>（資料2 参照）</b></p> <p>もちろん、それぞれの施設の独自の判断により、条文の位置づけは変化する。</p> <p><b>【第2段階】</b></p> <p>具体的な「指導計画」は、各施設の協同討議や保育者個人により決定される。</p>
<p>④ 絵本のタイトルと 選書基準</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの興味・関心を尊重した選書になっているか</li> <li>・「指導計画」との関わりでの確か</li> <li>・一冊、複数冊？</li> <li>・関連絵本の複数冊組み合わせ？</li> </ul>

⑤ 読みあいの方法・工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手遊び・わらべ唄・人形遊びなどを織り込んで</li> <li>・静かに、子どもたちの反応を引き取りながら織り交ぜて</li> <li>・絵本の生み出すリズム・動きを表現するなど</li> <li>・声量・抑揚・視線</li> </ul>
⑥ あらかじめ準備する補助材など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人形・スカーフ・音・楽器・レコード・季節の自然物（松ぼっくり・花・ススキ・魚・芋など無限）など</li> <li>・YouTube・新聞記事・写真・ビデオ・映画など</li> </ul>
⑦ 所要時間（期間）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入時間、一冊の読み合いの時間、読後の話し合い、続けて予想される活動（学期を超えることもあり）など</li> </ul>
⑧ 記録方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記憶による簡単なメモ</li> <li>・文章記録・ビデオ・写真など</li> <li>・記録者を準備するか、読み手自身が記録するかなど</li> </ul>
⑨ 今後の予想される展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び・詩・音楽・ダンス・造形・物語作りへの発展</li> <li>・子ども一人一人および集団としての子どもたちによる想像性と創造力の発揮</li> <li>・保育者の想像性と創造力の発揮</li> <li>・保育内容領域の充実</li> </ul>
⑩ 日時	(結果として複数の日・月や学期を超えることもあり)
<p>⑪ 批判的分析と考察</p> <p>ここは2段階に分かれる。</p> <p>【第1段階】 各施設の「要領」との整合性である。</p>	<p><b>【第1段階】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもは、日々の保育所の生活の中で、様々な活動を生みだし多様な経験をしている。こうした姿を記録することは、保育士等が自身の計画に基づいて実践したことを客観化することであり、記録という行為を通して、保育中には気付かなかったことや意識しなかつたことに改めて気付くこともある。」(文献4 / p.52)「指導計画の展開」より</li> <li>・「保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価をすることを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に務めなければならない。」 (文献4 / p.53)「保育内容等の評価」より</li> <li>・「(その) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう、例え</li> </ul>

<p>【第2段階】 具体的な「指導計画」(年・学期・月・週・日等)を実践した後の個別的な考察である。</p>	<p>ば、園児一人一人のよさや可能性などを把握するために、日々の記録やエピソード、写真など園児の評価の参考となる情報を生かしながら評価を行ったり、複数の保育教諭等職員で、それぞれの判断の根拠となっている考え方を突き合わせながら同じ園児のよさを捉えたりして、より多面的に園児を捉える工夫をするとともに、評価に関する園内研修を通じて、園全体で組織的かつ計画的に取り組むことが大切である。」</p> <p>(文献3 / p.117)「評価の妥当性や信頼性の確保」より</p> <p>・「文献3と同文」(表記の変更:園児→幼児、保育教諭等職員→複数の教職員、園全体→幼稚園全体)</p> <p>(文献5 / p.123)「評価の妥当性や信頼性の確保」より</p> <p><b>【第2段階】</b></p> <p>・具体的な「分析・考察」は、保育者個人や各施設の協同討議により決定される。</p> <p>・メモ・箇条書き、・自由記述・論文など</p> <p>・ただし、「要領」の条文をそのまま引き写すものではない。</p>
<p>⑫ 保育者の研修の継続性</p>	<p>・保育者の学ぶ機会の保障</p> <p>・最初は、読み方や一斉の枠組みに入れない子どもの処遇に悩みは集中するが、やがてそれは単純な技術論で解決できるものではないことに気づく。つまり、集団の中で個を育てるとは何かという、集団保育における核心の問題を浮かびあがらせる。</p> <p>・絵本を読みあうということが可能な保育の在り方(保育方法・集団の規模・年齢による変化など)を問いかける中で、集団保育そのもののもつ可能性や問題点が浮かび上がってくる。</p>

(佐々木宏子作成 / 2019. 12)

【引用・参考文献】

1. 『フランスの公共図書館60のアニメーション』  
(ドミニク・アラミシエル著 / 辻由美訳 / 佐藤涼子解説 / 教育資料出版会 / 2010)
2. 『読書へのアニメーション 75の作戦』  
(N・M・サルト著 / 宇野和美訳 / カルメン・オンドサバル + 新田恵子監修 / 柏書房 / 2001)
3. 『幼保連携型こども園 教育・保育要領解説』(平成30年3月)

(内閣府 文部科学省 厚生労働省／フレーベル館／平成 30 年 3 月)

4. 『保育所保育指針解説』(平成 30 年 3 月)

(厚生労働省 編／フレーベル館／平成 30 年 3 月)

5. 『幼稚園教育要領解説』(平成 30 年 3 月)

(文部科学省／フレーベル館／平成 30 年 3 月))